

昔々、村々を見て回る王がいた。彼はハマハメに行くことを告げるために使者を遣わした。村人たちは王を迎えるために準備をした。王が到着する日、同じ時にハマハメ地方の村であるヌゴレからひとりの老人がハマハメにやって来た。彼は、当時旅回りをしていた人々のひとりだった。彼は砂糖と呼ばれていたものを持ってやって来た。その砂糖は水に入れるとどうやら水の性質を変えるようで、甘くて心地よい味わいを与えることが出来た。老人はその砂糖で王のためにお茶を用意することにした。困ったことに、彼が持ってきた砂糖はたったひとつまみでスプーン一杯ぐらいしかなかったのであるが、王はひとりで来たのではなかった。王は臣下全員を引き連れて来ており、100人ほどの人々が王と一緒にお茶を飲むことになっていた。スプーン一杯だけ砂糖が入ったお茶はたった一杯である！

とにかくハマハメの住人たちは、自分たちの名物料理であるサグを用意するために全員が集まった。ある者は火を起こすのに柴を持って来て、またある者はココナツの実、さらにある者は鍋やおたまといった具合に。ハマハメ地方の23の村が王のサグを作るのために集まったのだ。ヌゴレの老人は当然お茶の係となった。そのために彼は大きな鍋を運んで来て火にかけた。

王と家臣たちが到着し、彼らは迎えを受け、晚餐の席についた。当時は、お茶を飲むのにココナツの殻を用いていて、各人がお茶用の殻を持つ権利があった。老人はスプーン一杯の砂糖を取り、王の殻にだけそれを入れた。他の殻には茶とシナモンの葉しか入っていなかった。王たちが席についた時、老人は各人の耳元まで行ってこう囁いた：

「我々村の民を何とぞお許し下さい。時間がなくて、ココナツの殻ひとつだけに砂糖を入れることしか出来ませんでした。ところがそれがどの殻なのかわからないのです！！」

お茶を味わった招待客はそれぞれが言った：

「ああ、私のは、砂糖を入れる時間がなかったものだ」。

彼らがお茶を味わっているうちに王が声を上げた：

「おやおや、このお茶の何とおいしいことだろう」。

そして他の者たちが王に続いた：

「その通り、特に我々自身が飲んだばかりのこのお茶は。王様、これは大変おいしいです！」

最後になってこの経緯が王に明かされた時、彼はハマハメの住人についての考えを述べた：

「ハマハメの人が、自分は君の友人だと言ったら、彼は本当に良い意味でそうなのだ。ハマハメの誰かと友人であることを君は決して後悔しないだろう」。